

概

説

春野町史概説

―はじめて読む人のために―

原 始・古 代

高知県吾川郡春野町は、土佐湾と高知市、土佐市、吾川郡伊野町に囲まれ、吾川郡南部を占めて面積約四十六平方キロメートル、人口約一万五千人の自治体である。北部山地と南部丘陵との間には、仁淀川の堆積した中央低地が拡がり、人びとの生活の場となっている。

何千年の昔は別にして、最近の秋山山根の発掘によれば、約二千三百年前山根では米作りがはじまり、弥生時代となる。同地は仁淀川の分流沿いのいわゆる自然堤防であって、今も昔も人の住むには好適である。人びとはここに住居を構えて、付近の低湿地にいねを作って暮しをたてる。もちろん漁猟や採集もともに生活の糧をえる道であった。こうした状態はしだいに同じ条件の付近に拡がり、また谷のより奥の扇状地にも及んでいく。

ところで米作りの開始は人びとの暮しを大きく変えていった。とくに有力者を中心にした村ができてきたことは、古墳時代への前進である。いまは滅びたが弘岡中の横手には小さい古墳があった。七世紀ごろの築造と推定されている。ここは前述した低湿地水田と自然堤防に近く、また少し北に行けば荒倉神社もある。有力者は土地と村人を支配するとともに、その先祖を祀って家の守り神とする。春野町の多くの神々は、いまは祭神もすべて中央の神々であるが、本来は村々の有力者―豪族の祖先であったと思われる。

古墳時代は四世紀から七世紀にかけてであるが、この時代には中央政府の勢力も中央の神々とともに及んでく

る。地方の有力者はその支配下に 国造^{くにのみやつこ}や 県主^{あがたぬし}となる。春野町と土佐市とは仁淀川を挟んで以前から吾南、高東と呼ばれて自然的には一地域である。ここに吾川国造が生れたと推定されるのであって、村々の豪族たちは、この広い地域にわたる吾川国造に統一され、さらに大和朝廷の支配に服したものと考えられる。

大化の改新は大化元年(六四五)のことで、その翌年から中央集権の律令制^{りつりょう}―改新政治が動き出す。土佐でも 国造、 県主^{あがたぬし}は廃止となり、新たに 国司・郡司・里長が置かれる。国司は中央より派遣されたが、郡司以下は在地の豪族から起用されたのであって、とくに郡司は国造の横^{よこ}まりが多かったので、吾川国造は改めて吾川郡司となる。こうして以後承和八年(八四二)に仁淀川を境にして吾川郡は、吾川郡と高岡郡に二分されるが、郡衙^{ぐんが}は西分付近に置かれ、ここには郡寺大寺も建てられたと推定され、吾川郡が広い地域にわたっていたものである。

さて郡の下には郷が置かれ、一郷(里)は戸数五十戸からなる規定であった。吾川郡は八郷であったが、後二分されて四郷づつとなる。春野町はそのうち桑原郷と仲村郷(長浜も含む)と次田郷^{すけだ}に当たるといわれる。すなわち桑原郷が弘岡に、仲村郷が西分・芳原・諸木に、また次田郷が森山、秋山、仁西に相当するといわれる。これらの郷にはそれぞれ豪族が里長に任命され、人びとは田地を公平に班給するとともに、人びとから租^そ、庸^{よう}、調^{てう}、雑^{ぞう}、出挙^{しゅこ}という重い負課を徴収することになる。仁淀川のあゆや海岸のあわびそれから山野の薬草、家々で織る布や絹がその重要なものであった。もっとも生活の安定も政治には重要である。郡司たちは「セイ本」といって、用水路の水源を整備したり、また農業技術の改善、疫病の対策等にも心掛けているが、もちろん現在の比ではない。

吾川郡の大野郷は土佐郡の鴨部郷とともに、天平勝宝四年(七五二)奈良の東天寺の封戸^{ふくこ}となって、その税収がそのまま東大寺へ納められることとなったが、これはやがて世の中が荘園制へと移る一つの現われともいわれている。天長三年(八二六)には、土佐ではじめて荘園が成立すると記録には伝えられ、土佐郡の久万庄(高知市)と香美郡の田村庄(南国市)とであった。こうして荘園が地方に生れてくると同時に、国司の政治が乱れてくる。国司がその権力を利用して私利を図るに狂奔する時に、起ってくる問題はまず治安の乱れであり、盗賊の横行であった。わけて海賊は多く、第十世紀はその害がとくに激甚であった。こうした時代に吾川郡が二分されたことは、地方政治の正常化への一つの努力と思われるが、またこれと併行して、郡内の郷に再編成が加えられ、桑原郷は大野郷と合併、また次田郷も仲村郷と合併、ついに両郷は歴史の上からは姿を消すことになる。また直接には海賊討伐のため、紀州(和歌山県)熊野神社とこれを守護神とする熊野の水軍が朝廷や院の尊崇を受け、やがて土佐へも先達の努力で熊野神社が勧請され、いまにいたるも芳原や西諸木の若一王子神社として尊崇される。もちろん在来の神と社殿をともにして祀られることが一般的であったと思われる。

国司政治の腐敗はこのようにして律令制を崩壊させるが、郷や荘園のなかには有力者が現われ、在庁^{ざいちょう}―在庁官人と呼ばれる国司の下僚となる。彼らは従来の郡司とも代って在地の実力者となり、広い田地を所有するとともに、多くの下人、所従といわれる隷属者を従えて大規模な経営を持つ。いわゆる長者であって伝説の主人公宇賀の長者はその一人であり、仲村郷の長浜(高知市)に住んだという。こうした有力者はもちろん治安の乱れにみずから武装して武士となり、やがて源平の二大勢力に組み込まれるが、とくに土佐は治承三年(一一七九)、平氏の武力による院政停止から平氏の知行国となり、平氏指揮下に武士は団結する。この代表が、吾川国造の伝統を持つと考えられる蓮池権頭家綱であって、平氏勢力に代わって流人となった源希義を監視し、やがて中世への転換期―源平の対決には、平氏のために源希義を殺害する。

